
珍妙ときどき微妙（意気地無し先輩 読み切り番外集）

紺とすん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珍妙ときどき微妙（意気地無し先輩 読み切り番外集）

【Nコード】

N3628Y

【作者名】

紺とすん

【あらすじ】

「意気地無し先輩との珍妙な日々」の後日談、こぼれ話、過去話など、番外編です。一話ごと読み切りで不定期亀更新の予定です（本編をR15としていたため、こちらも同様にしています。）

微妙な昼寝とサンドイッチ（前書き）

今回のようにサブタイトルが「微妙」の回は、ほぼ「先輩」の出番はない予定です。

先輩の話は、サブタイトルが「珍妙」になる予定です。
よろしく願います。

微妙な昼寝とサンドイッチ

大学入学後、二回目の夏休みも後半戦。

例によってバイト三昧（加えて仕上げなければならぬレポートが数本）の日々だけど、今日はお休みなので、映画館で涼しく映画鑑賞中だ。

単館上映の映画で、わたしは今日のお休みとこの映画を、けっこう前から楽しみにしていた。

映画は一人で見ている。なぜなら、一緒に来た人は熟睡しているから。わたしの肩にもたれて、かなり窮屈な態勢で。

熟睡してしまうほど興味がなければ、来なきゃいいのに、と思う。でも来る。それで恩着せがましいことは言う。そういう人だ、隣りの人は。そして相変わらず、わたしはこの人が好きである。

映画が終わってエンドロールが流れ、周りがざわめきはじめて明るくなった。映画に閉じた世界が終って日常に戻る、この瞬間を一人楽しむ。

隣りの人は、まだ寝てた。列のまんなかほどの席に座っていたこともあり、出口に向かうときに、わたしたちをまたいで行く人はいない。というか、他の客に避けられてる気がする……。

わたしはいったんは起こそうとしたのだが、思わず前髪の間から見える整った顔立ちに見入ってしまった。なんだかこの角度から見るのは新鮮……って、うわ

「起きてた！」

「寝てたけど。そっちこそ、何見てんの？」

閉じていたまぶたが持ちあがり、わたしの首にその人の腕が巻きついた。同時に、不穏な気配が無駄に無意味に全方位的に放射された、気がする。それこそ映画館を陥落する勢いで。

などと内心で突っ込みつつ、焦ってオタオタしてしまうのも相変わらずだ。

「まあまあ、おもしろかった」

「ずっと寝てて全然見てなかったよね？」

「映画じゃないよ。おもしろくてかわいかった」

出た、羽より軽い「かわいい」。

その後、さきほどまでの気配をあっさりひっこめて（自由に出し入れできるらしい）、さっさと立ち上がると、先に立って歩きだした。

外に出ると、さすがに日差しがまぶしく感じられる。それでも、映画館に入る前の、真上から太陽に溶かされるような感じはもうない。

時間は午後四時。

ねっとりまとわりつくような空気の中を並んで歩いていると、小さなビニール袋を持った女の子とすれ違った。

水の入ったビニール袋の、赤い金魚に目をうばわれる。

手のひら二つ分ほど先にあったその人の手に自分の手をすべりこ

ませると、ほとりとやさしく握り返してくれた。

「ええと。この状況は何で？」

今わたしがいるのは、この人の部屋。

「元気がないから、励ましてあげようと思って」

ローテーブルにマグカップ。背中にソファの背もたれ。ここまで
は普通。

「これ、励まされてるの？」

さっきまで、コーヒーを飲んだ。今は、

「わたし、脱がされてるよね」

「うん、脱がされてるね」

その間もボタンを外す手が休むことはなく、ぬるい空気に肌がさ
らされる。

「と、いうことは」

「そういうことだけど、脱がさなくてもできるよ」

「いやあの、一般的な方をお願いします・・・じゃなくて・・・あ」

はだけられた鎖骨の下あたりに、くちびるがあてられた。ふるえ
る、体が。

それが離れるときに、ひそやかな音が聞こえて、いたたまれない
気持ちになってしまう。

「脱がせてるのは誰の手？」

どうしてそんなこと聞くの。

「・・・の・・・んっ」

「さっき何かんがえてた？」

「なにも・・・かんがえてなかったよ」

くちびるを指でなぞられる。

「これ、誰の指？」

「・・・」

「何？」

「小野寺君だよ」

ようやく正しく答えたわたしのくちびるに、熱をもったくちびるが重ねられた。

ガシヤッ

そのとき、ひどく神経にさわる音がした。

慌ててそちらを見やると、マグカップが床に落ちて割れていた。中に少し残っていたコーヒーが黒く滲み出してる。

テーブルに肘でもあたったのだろう、これはただの偶然だ。

「・・・サンドイッチ、作ろうか」
「うん」

ちよつと、ほつとする。

こう、なんというか、もう少し主体的に行きたいというか、それでなければ、せめて無駄口たたかない方向に持っていきたいとか・・・一応恋するオトメなもので、そういうことに対して夢とか希望とか・・・うはは、はははははは、は。

わたしは気を取り直して態勢を立て直すと、マグカップを片付けにかかった。

バケットなんかを薄くスライスして野菜やペースト類をはさんだサンドイッチは、小野寺君の好物らしい。今日も映画が終わってから、一緒に材料を買ってきていた。

ちなみに「らしい」というのは、好みを把握していないためで、食べ物は何でも食べるけど執着は薄いように見える。

実は人間一般に対しても、食べ物に対するのと同じような態度が見え隠れすることがあるので、この辺はあまり深く考えない方が身のためだと本能が告げている。

そういう一面を見るくらいなら、さっきみたいに無駄口たたかれていた方がまだマシだ・・・や、あれもやだけど。

小野寺君の様子を見に行くと、トマトをきれいに薄くスライスしていた。

小さなキッチンのスペースは、あまり使われている様子もないのに、こういうことも器用にできてしまうところがちよつと腹立つ。

サンドイッチは、なかなかおいしそうにできあがった。

急におなかが減った気がして、わたしはばくばく食べてしまった。ひとの分まで食べたかもしれない。非常に満足だ。

送ってくれるというのを辞退して、一人で帰ることにした。なんとなく、一人で歩きたかった。

帰り際、さよならのかわりに言う。

「小野寺君。大好きだよ」

頭をわしっとつかまれた。

それから、一人で無事に平和に自分のアパートに帰って来たのだった。

そういうわけで、二人の間に特に進展はありませんが、おおむね仲良くしています。

おわり

マツコの憂鬱（小話）（前書き）

マツコはどうした、の声に勝手にお応えして、月影マツコさんその後の小話。

注・・・かなりおふざけ色が強く、本編とも直接かわらない内容になっています。

マツコの憂鬱（小話）

私はマツコ。

私は美しい。そして頭脳明晰。

されど、たった一人、思い人の心に届かない美貌や頭脳であるならば、そんなものは無きに等しい。

そう、この美貌や頭脳さえ、いつそ疎ましいほど。

クモの巣のように張り巡らせた罟から、いとも容易くのらりくりと抜け出してしまう人。

その人の名は、北島さん。

ただ一人、私のことを「マツコ」と呼ぶ人。その人に呼ばれると、「マツコ」の名は「アフロディーテ」にも相等しい響きをそなえる。

彼は時折、私と同じ学年の女性と食事をともにしている。

よもや彼は、あのようなチンクシャが好みなのかという疑念にさいなまれる最近の私。

いやまさか。いやそんな。そういった悪逆非道・阿鼻叫喚なできごとが世間に通用するのであれば、それはまさに世も末ですこと。

「北島さん、お食事？」

「やあ、マツコ。そうなんだ、お食事だったのだ、元気そうで何よりだ。じゃ、少し急ぐので、悪魔のような男に騙されないように注意しろよ」

このような会話を交わしたことが思い出されて、私の胸に灼熱の風が吹く。

悪魔のような男・・・それは、あなたのことね、北島さん。

悪魔のように、危険な男。

いつか、あなたを振り向かせてあげる。

だから、待っていらっしやい、北島さん。

＊この決意から数日後、月影マツコさんは誕対長（誕生日対策委員会委員長）と運命的な恋に落ち、危険な男は無事、どうでもいい人に格下げされた模様です。

おわり

珍妙な昼寝と写真（前書き）

高校時代の話です。

珍妙な昼寝と写真

文化祭が一週間後にせまっていた。

高校入学後、はじめて経験する文化祭で、わたしもそれなりに忙しく過ごしていた。というのも、くじ引きで文化祭実行委員とかいうものになってしまったためだ。

なんだかよくわからないエネルギーに翻弄されているうちに、一週間前になっていたというのが実感で、思ってた以上にたいへんな役割だった。

しかし、たいへんだと言ったって、自分の負担は生徒会の役員や執行部員の人たちとは比べ物にならない。

文化祭実行委員は生徒会役員の指示を仰ぐことも多いのだが、わたしが下校する時間になっても、もちろんみなさん、お仕事 중이다。徹夜になることもあるらしい。

その役員の中でも、わたしは副会長を務めている先輩からいろいろなことを教えてもらう機会が多くなっている。

現生徒会長である三年の速水先輩は非常に優秀な人だという噂だが、その分、人の意見を聞かないようなところがあるらしい。それに対する不満や、学校側の規則をうまくすり抜けて行わなければならない「汚いお仕事」は、副会長のこの先輩のところに集中するという。

考えただけでもストレスがたまりそうなのに、この先輩は、いつも機嫌のいい顔をしていた。

副会長は他にもう一人、この先輩と同じく二年の姫川先輩というきれいな人がいる。生徒会長の速水先輩と姫川先輩はいわゆる美男美女カップルだった。そして、速水・姫川の両先輩からも非常に信頼が厚いこの先輩が、姫川先輩に特別な感情を抱いていることは、周知の事実といっても過言ではなかった。

特別な感情を抱いている相手から、「お仕事」の上でだけ信頼されるって、辛いんじゃないのかな、と思う。でも辛いからって止められないっていうことも良く分かる。

自分がまさに、そういう状態だから。

いつからなのか、わたしは気が付けばこの先輩のことを考えるようになってしまっていた。はじめての感情を持て余して、委員としていろいろ教えてもらえるだけでも幸せなんだ、と自分に言い聞かせては落ち込む日々をわたしは送っていた。

でも、あと一週間して、文化祭が終わってしまったら。委員として指示を仰ぐ機会もなくなってしまう。たった一つの接点だったのに。

ため息をつきながら、手元のフォーマットに立ったまま目を通し、ミスがないことを再確認してドアを開けた。

みんな出払っているようで、ここ、生徒会予備室には、部屋の中央に白っぽい塊があるだけだった。

白っぽい塊・・・先輩が机につつぶして寝ていた。窓から差し込む秋の夕陽が、おだやかな光をその背中に投げかけている。

わたしは音をたてないように気をつけて、先輩にそっと近付いた。

疲れているんだろうな。でも風邪ひかないかな。

床に制服の上着が落ちていたので、拾い上げて静かに先輩の肩にかけた。恐る恐る顔を覗きこむと、幸せそうな顔をして眠ってる。なんだかじんわりと幸福な気持ちかわいてきて、少しの間、わたしは先輩の寝顔に見入っていた。

寝顔を独占することしばし。

先輩がみじろぎして、それまで投げ出された手の下に隠れていた何かが目に入った。

何か・・・見過ごしてはいけない何かが。

手を伸ばしてその何かを取り上げて見てみると、一枚、二枚、三枚・・・全部で十二枚！ 特定の女子の写真ばかり！！

姫川先輩の横顔アップ、後ろ姿の姫川先輩、頬杖をつく姫川先輩バストショット、体操着姿で微笑む姫川先輩、などなど・・・。

思わず先輩の顔を睨みつけると、あきらかに寝顔がニヤついている。

先輩、学校でいったい何やってんですかっ！

そう、こういう人だ、この人はっ。もうやめよう、この人のことを思うのは、今日限りでやめてやる！

わたしは写真を元に戻すと、先ほど肩にかけてあげた上着をひっぺがして床に叩きつけ、フォーマットの提出もあきらめて、予備室を出た。

憤然と歩いていると、速水会長とすれ違った。もしかすると、予備室に行くのかもしれない。

あつ、先輩！ あの写真のこと、会長にバレちゃうよ！

思わず引き返そうかと思ったが、いや今日限りで先輩のことはあきらめるんだったと思い出し、途端に足が重くなった。

はあ。やっぱり、あきらめるのは無理みたいだ。

「おい起きろ、この変態」

「ふあ・・・あ、速水、会長」

寝起きに一番ふさわしくない顔がオレの目の前に。

「さっきそこで、おまえのお気に入りの一年が凄い形相で歩いてるのとすれ違ったぞ。とうとう何かやってしまったのか」

「ひどいなあ。目が覚めて一番に目に入ったのが悪魔の顔ってことだけでも同情してくださいよ。オレが何かするわけないでしょ？」

あの子は何もなくてもこわい顔をしていることがあるのだ。そういう表情も悪くはないが、できればいつも、笑っていてほしい。

「ま、そうだろうな。ところで、ちゃんと手に入れたのか？」

悪魔が手を差し出している。

「ハイハイ、姫川の盗撮写真ね。ちゃんと取り上げて来ましたよ。メモリのデータも消去したし」

「うわっこれ、おまえのヨダレじゃないのか汚いな」

「会長。いい加減、姫川の虫対策とか汚いお仕事まわさないで下さいよ。文化祭前で忙しいんだし」

「文化祭前だから変な虫が湧くんだろ。そんなこと言っておまえアレ、ばらされてもいいのか？」

まったくあの子も、こんな男のどこがいいんだか。まあ、優秀なのは認めるが。

「ア・ク・マ・め」

不敵な顔で去っていく悪魔を見送ると、オレは先ほどの幸福な夢の続きを見るべく机につっぱした。何だかあの子の匂いがするような気がするのは、強い思いのなせるわざだろう。

夢の中でオレは、副会長としての苛烈極まるお仕事と過度のストレスのため、とうとう倒れて保健室で休んでいた。そこにお見舞いにやってきたのは、もちろんあの子である。

「せんぱい。ゆっくり休んでね。ほら、おふとんかけてあげる」

そう言っ、あの子はやさしくおふとんをかけてくれた。

「なんだか新婚サンみたいだね」

オレがそう言っ、あげると、あの子はなんと、頬を赤く染めておふとんをひっぺがしたのだった！

校内でなんて大胆な・・・いや、むしろ歓迎だよ、ムラサキちゃん。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3628y/>

珍妙ときどき微妙（意気地無し先輩 読み切り番外集）

2011年11月14日00時07分発行